氏　　名	**清 水 弘 美**
学 位 の 種 類	博士（保健学）
学 位 記 番 号	甲第 86 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 17 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	**地域生活支援に関するケアマネジメントプロセスにおける課題 ～多問題家族の事例をもとに～**
論 文 審 査 員	主査　新潟医療福祉大学　教授　横 山 豊 治 副査　新潟医療福祉大学　教授　渡 邉 敏 文 副査　新潟医療福祉大学　准教授　松 本 京 介

論文内容の要旨

介護保険制度におけるケアマネジメント実践現場では、常に「多問題家族」に見られる重層化したニーズを持った利用者が存在し、その支援の困難性については、「困難事例」として地域ケア会議でもっとも多く検討されてきた。しかし、「困難事例」とされているものの中には、対象者が主観的に困難と感じている事例が含まれているため、本研究では客観的に問題が重層化している事例(家族)を指す「多問題家族」への支援に着目し研究対象とした。

本研究の目的は、地域において「多問題家族」に見られる重層化したニーズに対応した包括的なケアマネジメントの具体的展開プロセスを高齢•障害の各領域におけるケア会議とその会議に関わっているケアマネジャーを対象とした調査結果から明らかにすることである。調査として A 県 B 市において、多問題家族事例の支援過程における 11 のケア会議を対象に参与観察を実施した。また、その事例に関わりを持つケアマネジャー7 名を対象に半構造化インタビューを実施し、収集したデータを修正版グラウンテッド•セオリー •アプローチ(M-GTA)を用いて質的に分析した。分析テーマを「多問題家族の支援ネットワークにおける支援計画策定プロセス」とし、分析焦点者は「多問題家族の支援に関わるケアマネジャー」とした。分析の結果、21 概念と 8 カテゴリーが抽出された。またコアカテゴリーとして『家族支援チームの中心的役割の必要性』を抽出した。そして、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを［］、概念を《》で示し、結果図、「多問題家族の支援ネットワークにおける支援計画策定プロセス」として作成した。次にその概念の関係性をストーリーラインとして表した。

ケアマネジャーは、多問題家族の支援において『家族支援チームの中心的存在の必要

性』と家族全体支援に対する《具体策がみえない》という【ジレンマ】を抱えていることが明らかになった。その結果より、支援計画の策定や中心的役割を担う機関が曖昧なままケアマネジメントプロセスが展開されていることが判明した。

ケアマネジメントプロセスにおいて計画の策定は支援ネットワークの活動を統合するために必要である。そのため計画の策定が可能となるケア会議の運営について十分に検討する必要があると考える。また、多問題家族のような重層化したニーズに対応するために、多分野にまたがる支援ネットワーク(チーム)を形成するにあたっては、中心的存在の明確化を図り、その責任において情報が集約されモニタリングや評価等のケアマネジメントプロセスが実践できるよう検討する必要があると考える。

重層化するニーズに対応するケアマネジメントの実践において、多分野にわたる支援ネットワーク(チーム)を形成しても断片的な連携では不十分である。責任の所在を明らかにし、支援計画を策定した上で実践される継続的に包括的なケアマネジメントのシステムを実践的に構築していくことが課題である。

以上のことから、今回の研究で対象にした現象の特性を簡明にケアマネジャーらに説明する上で活用できる「現象特性」を、一つの集合体と集合体を『まとめて率いる』といううごきとして捉え、それは異なる楽器のチームとチームを統合し演奏するオーケストラのようだとまとめた。

本研究は、地域において「多問題家族」に見られる重層化したニーズに対応した包括的なケアマネジメントの具体的展開プロセスを明らかにしようとしたものである。その結果、次の 2 点が明らかとなった。1 点目は、家族全体を視野に入れた支援計画策定が明確にされないまま支援が行われていることであり、2 点目は、多問題家族全体の支援チームをまとめる役割である中心的存在が曖昧なままケアマネジメントプロセスが展開されていることである。これより、多問題家族に見られるような重層化したニーズに対応したケアマネジメントプロセスが包括的•継続的とはいえず、有機的に機能していないことが示唆された。

本研究から得られた結果は、一地域で行われた多問題家族のケア会議やそれに関わるケアマネジャーという限られたフィールドから得られたデータに基づいている。重層化するニーズに対応するケアマネジメントプロセスの具体的展開を実践可能なものとするには、さらなる事例の検証や調査を行い、リーダーシップを担う機関の選定方法や支援目標を表示した家族全体の支援内容がわかる支援計画書の作成方法について検討を重ねる必要がある。これらについては、今後の研究課題としたい。

キーワード：
多問題家族 ケアマネジメント　重層化したニーズ　支援ネットワーク　M-GTA

論文審査結果の要旨

1．本論文は、 本邦の地域生活支援の実践現場におけるケアマネジメントの展開プロセスに関する調査研究の成果をまとめたものである。

2．本研究は、ケアマネジメントがその包括的・継続的な本来の機能を発揮すべき重層化したニーズを有するケースに対して、具体的にどのように展開されているのかをケアマネジャーらが日常的に行っている「ケア会議」への参与観察とケアマネジャーへのインタビュー調査によって明らかにしたところに独創性がある。ケアマネジメントの展開過程で開催される地域でのケア会議の実情については、参加者が平素から抱いている不全感や問題意識は自覚されていながら、暗黙知に留まっていた事柄に調査研究の目を向け、改善への課題を言語化、可視化する試みに取り組んだところに新規性が認められる。そして、地域包括ケアの推進、地域共生社会の実現が大きな社会的課題となっている中で極めて時宜を得たテーマに挑んだ研究といえる。

3．本研究の評価できる点は、第一にケアマネジメントが本来の機能を発揮しているかどうかが問われるケースとして「支援困難事例」ではなく「多問題家族の事例」を検討する時のケア会議に焦点を絞った点が挙げられる。対人援助の実践現場では、近年、後者も前者に含めて用いることが多くなっているが、前者は主観的に困難さを感じている事例が含まれ得る一方、後者は客観的に問題が重層化している事例であるため、重層化したニーズに本来の機能を発揮しやすいケアマネジメントの展開プロセスを観察するための調査対象として、あえて後者のケースに絞った点が本研究の特徴ともいえる。

　第二に、参与観察のフィールドノートやインタビュー調査の逐語録をデータとして、質的分析を行う方法としてＭ－ＧＴＡ（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いて領域限定型の理論生成を丁寧に行っている点が評価されるが、それが適切にできるためにコロナ禍以前の段階で都内で開催されていた同分析法を学ぶ研究会に通って修得に励んだ努力の成果が伺われる。

Ｍ－ＧＴＡによる分析結果として 21 の概念が生成されて言語化が図られ、それらの相互関係が結果図で可視化され、ストーリーラインで文章化された。

4．指摘事項について

①目的については、中間発表での指摘を踏まえ、より明確に記述されている。

②方法について、11 のケア会議で参与観察を行い、その検討事例に関わる 7 名のケアマネジャーに個別のインタビュー調査を行って収集したデータをＭ－ＧＴＡにより質的に分析しているが、論文では特にその分析手順について要諦を踏まえた記述を行っている。

③結果については、審査会で結果図（図２）における【ジレンマ】の位置付け方を確

認する質疑応答があった。

④考察については、論文全体で多用されている「重層化するニーズ」という表現について、「複合化」「複雑化」とせず、「重層化」とした意図を確認する質疑応答が審査会で行われた。

5．本研究の課題

本論文中にも記述されているとおり、①ひとつの地域でのケア会議とケアマネジャーを対象にした調査に依拠しているため、全国的な傾向なのかは断定できない②ケアマネジメントプロセスのうち、支計画策定プロセスに焦点を絞ったため、「モニタリング」「評価」のプロセスに至るまでは言及できていない点が本研究の限界であり、今後の課題として研究対象を拡げていく余地があるといえる。

以上のことから、審査委員会は本論文を博士論文に相応しいと認める。